

## OPEC+(プラス)産油国の生産動向から見た世界の石油需給の現状と見通し

### 1. OPEC+会合の決定

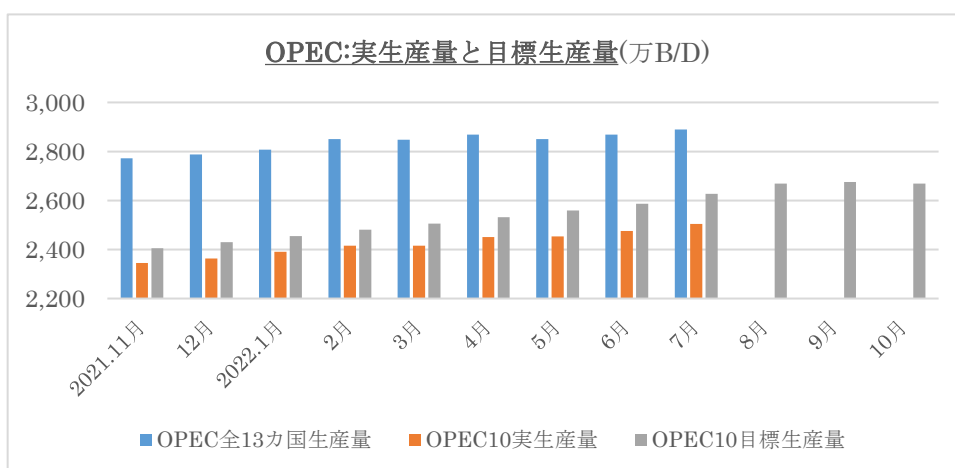
9月5日、サウジなど OPEC10 カ国とロシアを含む非 OPEC10 カ国(いわゆる OPEC+、プラス)は10月の目標生産量を10万 B/D 減産することを決定した<sup>1</sup>(注、OPEC 加盟13か国のうち、イラン、リビア、ベネズエラは対象外)。OPEC+は2020年に950万 B/D の大幅減産を決定、その後減産緩和(増産)に転じ、今年8月までに2020年以前の生産水準に戻している。しかし価格は依然高水準にとどまり、インフレを恐れた米国は6月に大統領がサウジを訪問、増産を強要している。

8月の OPEC+会合は9月に10万 B/D 追加増産を決めたが、これは全世界の消費量約1億バレル/日の0.1%にとどまり、米国に義理立てしただけで市場への影響力はなかった。逆に世界各国のインフレ、中国のコロナ対策ロックダウンにより、9月7日現在ブレント原油価格は90ドル切れ目前である。石油収入に大きく依存しているロシアはウクライナ戦争の戦費調達のためにも石油を高値に維持することが不可欠である。サウジは今度はロシアに義理立てをして10万 B/D の増産に合意した。つまり10万 B/D 増産はわずか1カ月で反故にされたのであった。

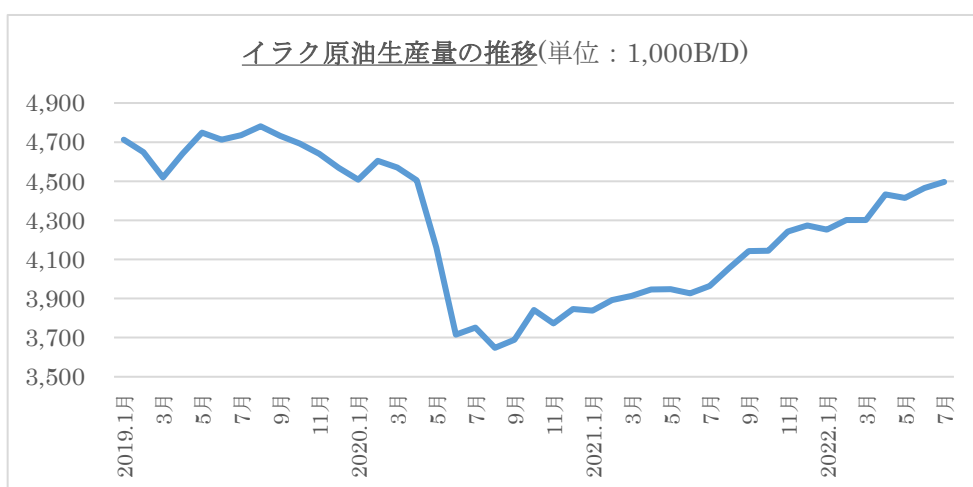
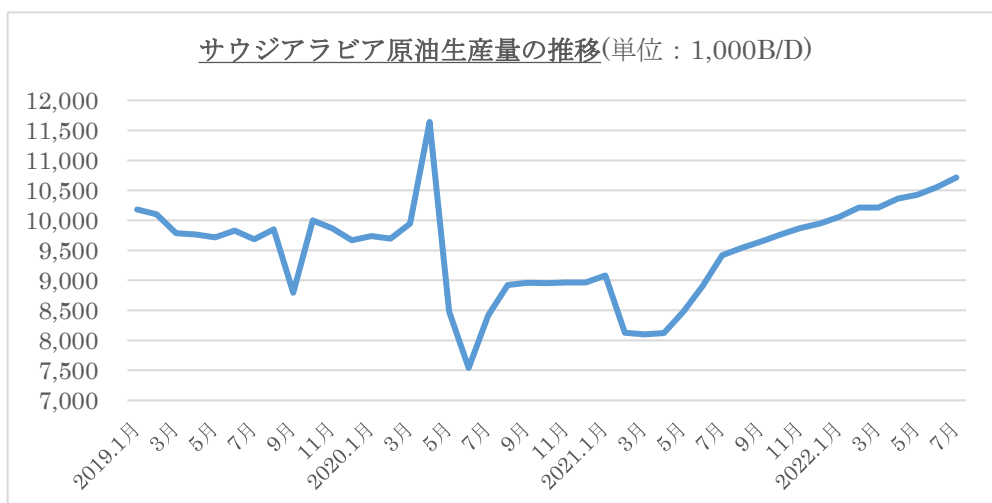
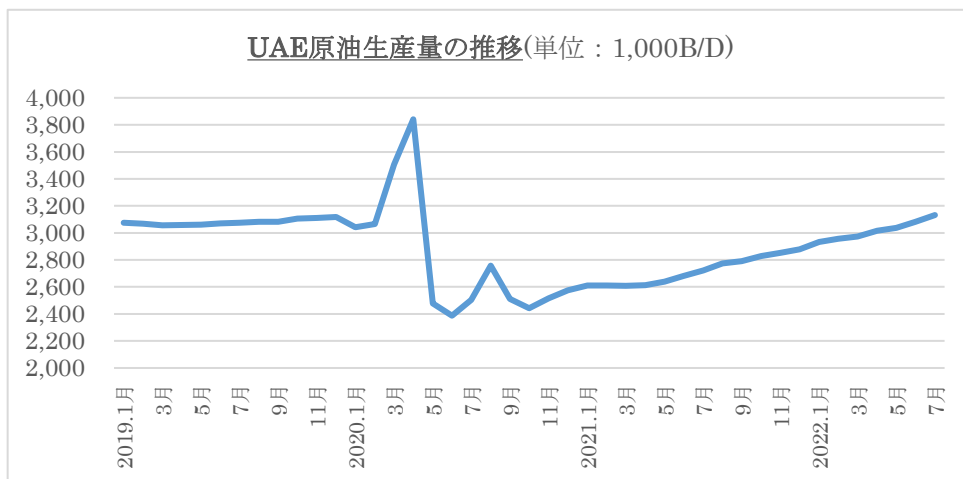
現在 OPEC+が20カ国に示している目標生産量(Required Production)は43,854千 B/D であり、内訳はサウジとロシアが同じ11,004B/D、イラク4,651千 B/D、UAE3,179千 B/D などである(詳細は末尾表1-D-2-36 参照)。

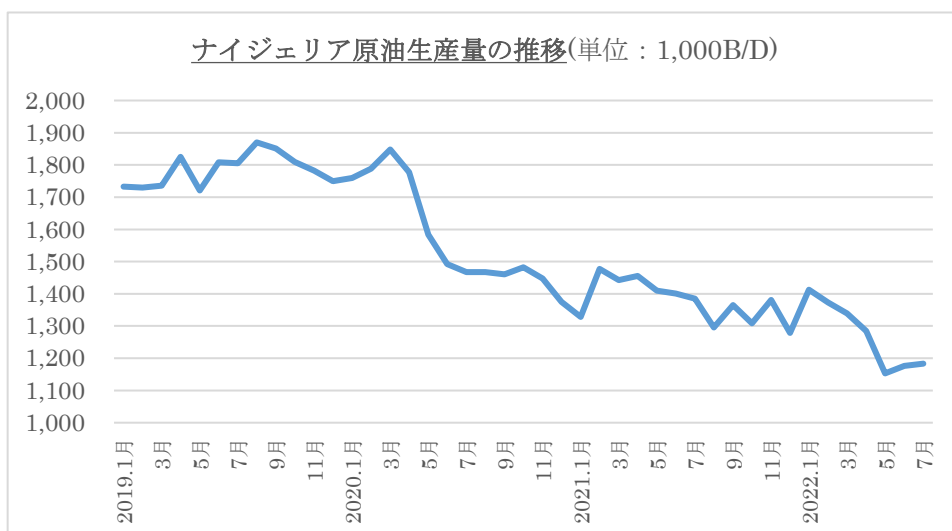
### 2. 広がる目標生産量と実生産量の格差(サウジ/UAE/イラク/ナイジェリア)

このうち OPEC10 カ国について OPEC 月次レポートにより目標生産量と実生産量を比較すると、昨年11月は目標生産量2,405万 B/D に対し実生産量は2,345万 B/D で60万 B/D が未達成であった。OPEC+は会議の都度目標達成を各国に促したが、むしろギャップは大きくなる一方であり、7月時点では目標生産量2,628万 B/D に対し実生産量は123万 B/D も少ない2,505万 B/D にとどまっている。



これを国別に見ると、UAE は目標を 100%達成、サウジも目標をわずかに下回る生産量であった。またサウジに次ぐ OPEC 第 2 位の生産国イラクは 2020 年夏以降着実に生産を増やしている。これに対しナイジェリアとアンゴラは目標を大幅に下回っている状況である。ナイジェリアは国内情勢が不安定でここ数年生産減退がはなはだしく 7 月は目標 1, 826 千 B/D に対し実績 1, 183 千 B/D で▲616 千 B/D が未達である。

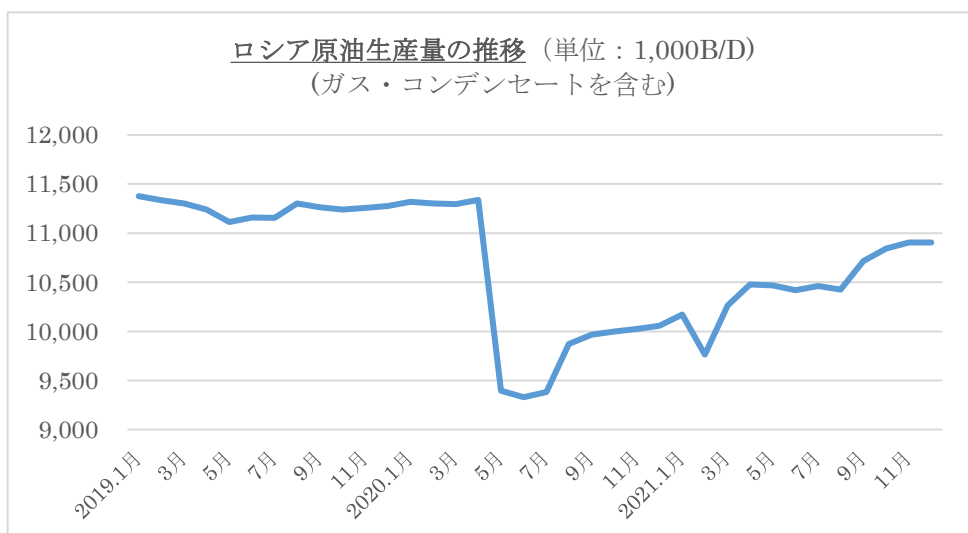




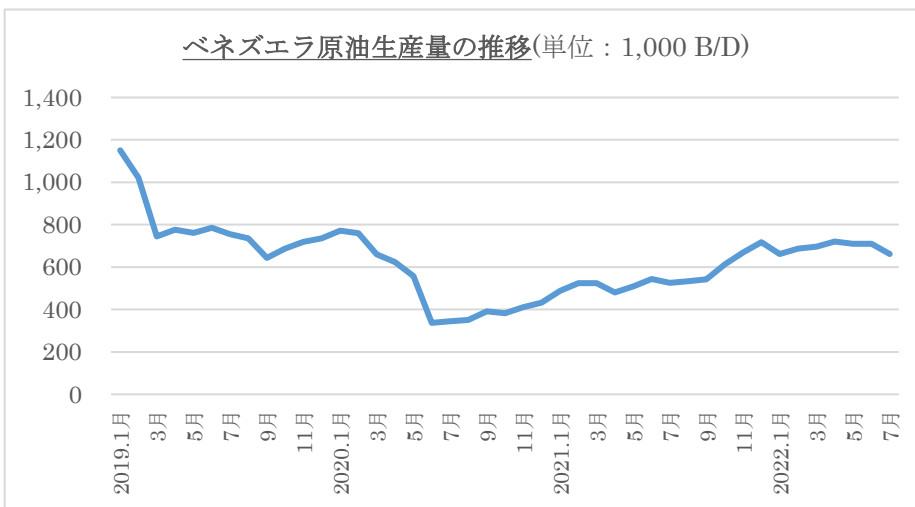
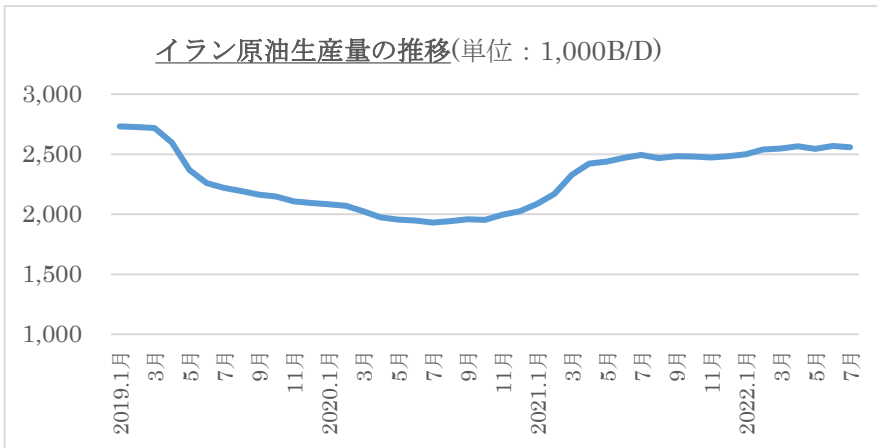
### 3. 経済制裁・内戦で生産が減少している産油国(ロシア/イラン/ベネズエラ)

OPEC+関係国の中には欧米の経済制裁で輸出が制限され、或いは内戦により生産が不安定な国がある。ロシア、イラン、ベネズエラ(以上経済制裁)及びリビア、ナイジェリア、アンゴラ、コンゴ(以上内戦)の各国である。

ロシアについては今年 1 月以降、生産実績が公表されていない<sup>2</sup>。またウクライナ侵攻後の経済制裁により欧州向け輸出が停止した後は、インド、中国への輸出が増加し、生産量は大きく減少していないとの報道もあるが真相は不明である。



イランはかつてイラクと並ぶ 400 万 B/D の生産量であったが、経済制裁の結果、現在は 250 万 B/D 程度にとどまっている。ベネズエラもイランと同様かつては 300 万 B/D の生産量であったが、左派政権の失政と米国の制裁が重なり、現在の生産水準は 70 万 B/D まで落ち込んでいる。リビア及びナイジェリアは内戦により生産水準が急激に落ち込んでいる。



#### 4. 消費国の動向(米/日/EU/中国/インド)

米国は世界最大の石油(及び天然ガス)生産国であると同時に消費国であり、エネルギーの完全自給体制を樹立している<sup>3</sup>。従ってほぼ完全な消費国と言える EU 或いは日本と米国を同列に論じることはできない。米国は EU、日本に対して液化天然ガス(LNG)を輸出している。また ExxonMobil の 4-6 月四半期の利益は 179 億ドルに達し、これは出光興産の売上高を上回るほどである<sup>4</sup>。米国内にはエネルギー問題は無いと言えよう。ただ同国では一般消費者が石油価格に敏感である。バイデン大統領がサウジアラビアに乗り込み原油増産を要請したが、これは秋の中間選挙を控えたスタンドプレーと言えよう。原油価格高騰にもかかわらず米国内のシェール石油生産業者に増産気配は見えない。ロシア、イラン、ベネズエラに対する経済制裁で世界的に石油の供給がタイトになってもほとんど痛みを感じないのが今の米国である。



日本は石油を 100%輸入に頼っているが、米国追従外交を強いられイランに次いでロシアからの原油輸入もストップしている。代替できるのは中東湾岸諸国だけである。その結果、7月の国別輸入シェアは UAE42%、サウジ 35%はじめ GCC が 98%を占める状況である。幸い天然ガスについては長期契約がほとんどで当面供給不足の恐れはなさそうである。問題はエネルギー価格の上昇と為替円安により貿易収支が極めて厳しくなっていることである。

日本に比べ EU は深刻である。ロシアのウクライナ侵攻に抗議して露原油の輸入を年内でストップすると宣言した。本当は天然ガス輸入もストップしたいところであるが、ロシアに頼り切っていた EU は返り血を浴びる。ロシアは EU の窮地を見透かすように Nordstream パイプラインの全面停止をちらつかせている。LNG 輸入設備が比較的少ない EU では LNG には簡単に手が出ない。アルジェリア、リビアなど北アフリカ諸国と地中海海底パイプラインによる増量を画策しているが、仏とアルジェエリアは植民地時代のわだかまりが解けず、リビアは内戦状態である。EU は LNG 輸入の拡大に踏み出し、これまで縁遠かった中東湾岸諸国に急接近している。環境問題に深入りし率先して脱炭化水素、再生可能エネルギー推進を進めようとしたために当面の石油・天然ガス争奪戦に明らかに乗り遅れている。

間隙を縫ってしたたかに動いているのがエネルギー消費量世界 2 位の中国と同 4 位のインドである(因みに 1 位米国、3 位ロシア)。両国は米欧日が提唱するロシアボイコットには加わらず、輸出先に苦しむロシアの足元を見て原油を買い叩いている。インドが 35ドル値引きで購入したと言うニュースが流れ<sup>5</sup>、或いは中国の原油輸入相手国は 5-7 月の 3 か月連続でロシアがトップと報じられている<sup>6</sup>。

## 5. 今後の動向を占う

以上述べた如く石油・天然ガスの需給は変動要因が多く、また揺れ幅も小さくない。消費国が今後とも米国主導で国際協調できるかは疑わしい。一方生産国側を見ても OPEC+が一枚岩であり続けるかはわからない。最大の不確定要因はウクライナ戦争の推移である。

ロシアがウクライナから簡単に撤退するとはだれも考えていないであろう。燃料と穀物と言う二大資源を有するロシアは非常時の耐性(レジリエンス)が高い。ウクライナは欧米の軍事支援でようやく持ちこた

えているが、EUには援助疲れの気配がある。この上、ロシアからの天然ガスが止まれば(たとえ巨額の国費を注ぎ込んで代替供給源を確保したとしても)一般市民の不満は大きくなるであろうことは間違いない。NATOに加盟していないウクライナの「自由と民主主義」を守るために独仏の市民がいつまでも我慢できるとは思えない。

これに対してロシアは戦略的には有利な立場にある。それはプーチン大統領が圧倒的な権力を持っているためである。ロシアは当面 OPEC+のイニシアティブを握り続ける。サウジアラビアの支配者(サウジアラビア)はバイデン政権の庇護が期待できないため、ロシアに引きずられるであろう。その方が原油価格を高値に誘導できるからである。

中国とインドは欧米、ロシアのいずれを支持するか明確にしないまま、ロシアの石油・天然ガスを安値ダンピングで調達し、経済回復を目指すことになる。

こうして米、EU、日本の先進国グループと、ロシア、インド、サウジアラビア、中国(RISC)グループの二大グループによるしのぎ合いになる、と言うのが筆者の見立てである。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行      〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601  
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642  
E-mail; [maeda1@jcom.home.ne.jp](mailto:maeda1@jcom.home.ne.jp)

**OPEC 及び Non OPEC (OPEC+) の目標生産量(Required Production)**

国名	2022年5月	6月	7月	8月	9月	10月
アルジェリア	1,013	1,023	1,039	1,055	1,057	1,055
アンゴラ	1,465	1,480	1,502	1,525	1,529	1,525
コンゴ	312	315	320	325	325	325
エクアトール・ギニア	122	123	125	127	127	127
ガボン	179	181	183	186	187	186
イラン	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)
イラク	4,461	4,509	4,580	4,651	4,663	4,651
クウェイト	2,694	2,724	2,768	2,811	2,818	2,811
リビア	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)
ナイジェリア	1,753	1,772	1,799	1,826	1,830	1,826
サウジアラビア	10,549	10,663	10,833	11,004	11,030	11,004
UAE	3,040	3,075	3,127	3,179	3,186	3,179
ベネズエラ	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)	(対象外)
<b>OPEC 10 小計</b>	<b>25,589</b>	<b>25,864</b>	<b>26,276</b>	<b>26,689</b>	<b>26,753</b>	<b>26,689</b>
アゼルバイジャン	688	696	706	717	718	717
バハレーン	197	199	202	205	205	205
ブルネイ	98	99	100	102	102	102
カザフスタン	1,638	1,655	1,680	1,706	1,710	1,706
マレーシア	571	577	585	594	595	594
メキシコ	1,753	1,753	1,753	1,753	1,753	1,753
オマーン	846	855	868	881	883	881
ロシア	10,549	10,663	10,833	11,004	11,030	11,004
スーダン	72	73	74	75	75	75
南スーダン	124	126	128	130	130	130
<b>非 OPEC 10 小計</b>	<b>16,537</b>	<b>16,694</b>	<b>16,930</b>	<b>17,165</b>	<b>17,202</b>	<b>17,165</b>
<b>OPEC+合計</b>	<b>42,126</b>	<b>42,558</b>	<b>43,206</b>	<b>43,854</b>	<b>43,955</b>	<b>43,854</b>

1 OPEC Press Release: [https://www.opec.org/opec\\_web/en/press\\_room/7002.htm](https://www.opec.org/opec_web/en/press_room/7002.htm)

2 <https://minenergo.gov.ru/en/activity/statistic> 参照

3 拙稿「bp エネルギー統計 2022 年版解説シリーズ」参照。

4 表 1-D-4-26「国際石油企業(IOCs), ARAMCO, ENEOS & 出光興産の四半期業績比較(2022年4-6月)」参照

5 例えば 2022/3/31 Arab News 'India bought Russian oil at a discount of \$35 per barrel: Bloomberg'

<https://www.arabnews.com/node/2054236/business-economy>

---

<sup>6</sup> Russia continues to be China's top oil supplier for 3rd month; Saudi Arabia trails behind  
<https://www.arabnews.com/node/2147056/business-economy>

2022/8/21 Arab News